

風のように



甘木教会

主任牧師：白川道生 牧会委嘱牧師：竹田孝一

しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。

ヨハネによる福音書14:26～27

【説教要旨】

本日の福音書の日課は、弟子たちに、そして私たちに伝え、残したいイエスさまの別れの言葉、つまり遺言です。イエスさまが天に昇られる昇天日の礼拝の前には、イエスさまの別れの言葉、遺言が読まれます。

イエスさまが昇天するということは、今まで弟子たちが目で見、耳で聞いていたイエスさまと別れるということです。自分たちを直接、守り導いて下さったイエスさまがいない、自分の足で生きなければならない日々を弟子が生きるということです。心穏やかなことではありません。心を騒ぐことであり、動揺せざるをえないことです。それは、私たち信仰者は、今、直接イエスさまを見ることが出来ません。しかし、人生において、心騒ぐ出来事に多く出会います。その時、心のどこかに直接イエスさまにお会いして、その解決の道を教えて欲しいという気持ちになります。思うようにいかないと、つい「神などいない」と、つぶやくそういう状況、イエスさまと分かれていて、見えず、自分の足で生きなければならないという状況にあることをイエスさまご存じです。

今日の礼拝の福音書の日課をヨハネ福音書5章からとっても良いとあります。エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。3aこの回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。3b-4+5さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。6イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。7病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

平和という言葉が口語訳聖書は平安と訳しています。平安の反対、それは不安であり恐れであります。この病人は不安のただ中で38年も病気で苦しんでいた。心騒がせていたのです。この聖書の箇所は、私が高校生の時長い闘病生活でこの病人と私を重ねて読んでいました。いつ、自分はこの苦しみから解放されるのかと、さらに「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」という孤独の深みで、不安の日々でした。イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。私も「良くなりたいか」とイエスさまから声をかけていただきたいと何度、願ったでしょうか。

不安に陥った時に、不安の状態が取り除かれて、再び静かな落ち着きを取り戻した時に平安、平和になったと言います。これが**世が与える**平安、平和で、私が求めていたことです。

しかし、イエスさまのいう平安、平和は、どうも私たちが思っているような平安、平和ではないようです。口語訳聖書は**世が与えるようなものとは異なる**と訳しています。パウロの手紙をみていますと「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」あるいは、「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・

イエスによって守るでしょう。」という言葉があります。平和、平安は、イエス・キリストからくるということです。イエスさまは十字架において、平和を与えてくださいました。十字架は、最も平和と程遠いものです。イエスさまは平和と最も程遠いところを生き、死にました。イエスさまが歩まれた道は、私たちに苦しみ、脅かすあらゆるものがありました。しかし、イエスさまはあらゆる不安や恐れを越えて、築かれた平和であり、それを私たちに与えるというのです。人の思いを越えて、守られ、揺るぎないイエス・キリストの平和であります。パウロは、「あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守る」と私たちに伝えるのです。

神の平和をもたらす**弁護者**、**聖霊**をパウロに、私たちに与えてくださいました。「**弁護者**、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる**聖霊**が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

不安の状態が取り除かれて、再び静かな落ち着きを取り戻す、これが、世が与える平和です。しかし、パウロがイエス・キリストの福音を伝えていくゆえに、不安の状態が取り除かれて、再び静かな落ち着きを取り戻したかということと逆です。常に不安があり、静かに落ち着いた状況ではありませんでした。しかし、**弁護者**、**聖霊**は働いています。

不安があり、心穏やかでなくても、**心を騒ぐ**状況であっても、イエスさまがいてくださり、「良くなりたいか」と声をかけてくださいます。この方がいるのです。だから、パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからであるというように、確信にいたるこの世的根拠がなくても次へ踏み出す勇氣こそ、**聖霊**であり、**世が与えるようなものとは異なる**平安へといれられるのです。

奇しくも高校以来、病気をして今日の聖書の日課を読んでいます。高校生の時は、「すると、その人はすぐに良くなって、床を

担いで歩きだした。」ということを強く望みました。主は応えてくださいました。病気は治り、起き上がり、床を担いで歩き、神学校にいけました。しかし、今は、病気が治るどうかでなく、いつも私と共にいてくださり、声をかけてくださる主がおられる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるなという声があります。

牧師室の小窓からのぞいてみると



現代社会は、ブレーキの利かない自己中心社会であり、技術がそれをささえきるところまできた。人間より賢くなっている人工知能であるAIは、どこまでさらにこの社会を変えていくのか。人間が制御できなくなると、偶発的に人工知能が核戦争を起こすことも指摘している。また、例えば、今、翻訳しようとしているルターの創世記をAIの翻訳機能に託すとより早く、より正確に翻訳するだろうが、翻訳家が必要なくなる。失われていく雇用、49%の人が代替える職場にあると言われていいる。これを自己中心の世界にあって、人はこの49パーセントの人を救済するだろうか。人類は危機のなかにある。終末は、近い。しかし、「世界の周縁に生きている人々に 心を開いていくようにしましょう。たくさんの人が危機と苦しみが隣り合わせの状況で生きることを余儀なくされています。そこは近代世界が生み出した世界です。」

（「憐れみの特別聖年」ーカトリック中央協議会）

教皇フランシスコの言葉。

「世界の周縁に生きている人々に 心を開く」とは自分の属している世界の幸福を最優先するという自己中心からの脱却こそが危機を乗り越えると思います。「自分を愛するように、隣人を愛する」、主・イエス・キリストの言葉を反復しましょう。

園長・瞑想？迷走記



5月は、2024年度幼稚園決算期に入り、事務作業に幼稚園は忙しくなる。そんなときこそ教育・保育の充実を考える時である。

日毎の糧

神がわたしたちを憐れみ、祝福し、み顔の輝きを
わたしたちに向けてくださるように、詩篇67：2



ルターの言葉から

信仰はあなたを導き上げ、神のみこころと意志をあなたに
開き、そこにあなたはひたすら、溢れるばかりの恵みと愛
を見る。それが神を正しく見る事であり、肉体の目で見るとは
なく、信仰によって見るのであり、信仰が、父のような神の親密
なところを見るのである。

『ルターの言葉 信仰と思索のために』W.シュパルン編 湯川郁子訳 教文館)

祝福の日々

詩篇67篇の最初の「神がわたしたちを憐れみ、祝福し、み顔
の輝きをわたしたちに向けてくださるように、」という言葉
を礼拝の祝福にあるアロンの祝福に似ています。

私たち人生を振り返ると良いことばかりでなく、苦しいこと
もあります。乗り越えることが出来るのだろうかということも
あったでしょう。人生の途上において、それがごく普通の思い
ではないでしょうか。

今、自分の歩んで来た日々、小さな歴史ですが、私の歴史は
「神がわたしたちを憐れみ、祝福し、み顔の輝きをわたしたちに
向けてくださった」というものです。老シメオンが「主よ、今
こそ、この私を安らかに去らせてくださいます。この目で救い
を見たからです」というように老いていく信徒の私には、その
ことが実感できます。それは老いの恵みであり、また同時に今、
苦しい途上を生きている方々に、「今は漆黒の闇かしれないが、
祝福にありますよ」と伝えていきたいですね。

「自分のためでなく、隣人のために生きて仕える生に、
神の祝福があるように」 ルターの言葉

祈り：主よ、あなたの祝福の日々を歩んでいる幸いを実感できる人と
してください。

甘木通信

「隣人のために一人のキリストとなる」

「隣人のために一人のキリストとなる」ということが、今回のルーテル教会の宣教目標になった。



時代に応えていく良い目標であると感じた。「あなたがたキリスト者は、小さなキリストである」とルターが言ったように、きわめてルター的な言葉である。

ルターは、私たちは神に愛された存在であると強く、私たちに伝えています。愛されている私たちは、「自分を愛するように、隣人を愛しなさい」というイエスさまの言葉を行えるものとされたのです。それは、同時に「小さなキリスト」とされたのです。

では、甘木という地域で私たちが隣人を愛し、助けていくとは、どういうことでしょうか。

私たちは、まずこの地域の人を愛するということです。そして、「何をすれば、喜ばれるか」ということを聞くということから始まるでしょう。

五月初め、手伝っていただき、鯉のぼりをあげました。外から見ても分かるようにしました。いつか、ポールを立て、鯉を泳がしたいですね。なぜか。泳ぐ鯉をみて地域の人が季節を感じ、元気になってもらおう。それが愛することの行動だと思います。

休園中の園舎がありますね。これはマイナスではありません。これを使って愛の行動、そして互いに地域の人と助け合う場所をいただいたのではないのでしょうか。

小さなキリストとされたということでしょうか。

(甘木日記)土) 葬儀出席のため東京。恵み降り注がれた葬儀だった。日) 早朝、甘木。礼拝の準備。礼拝、みんなで幼稚園、教会の掃除、お茶の会、役員会。主管牧師に送られて久留米に帰宅。恵みが降り注ぐ。月) 保護者会の役員と懇談会、暑さを避けるテント張りを卒園生の祖父と一緒に。北部園長会と続いた。帰園すると主任の義母がなくなったというので明日からの保育立てを指示。火) 年長も芋の苗植え終了。さて、育つか。水) 職員会議。午後から大雨になる。木) 松崎保育園、午後から甘木へ行く予定が日善幼稚園へ変更。金) 早朝は、主日の準備。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人（牧師）もいます。

土）大雨。その中をバスで斎場に向かう。牧師、三人にと娘さんとの主に支えられ天に帰られたT、M姉の葬儀。雨も恵の雨。「雨をふりそそぎ聖歌570」で、ブラジル語讃美歌では、「シューヴァス（雨）・デ・ベンソンス（多くの恵み）」という讃美歌を思い出した。「夕立ちのごと天つ恵みをイエスよ 今 ここにそそぎたまえや」とリフレインしている通り、神の恵みの中を生きかされた方であった。恵みを頂きつつ、東京から福岡へ帰る。飛行機も遅れる。日）早朝の電車で甘木に向かう。昨日、留守をした分、遅れていた仕事をし、いつものように掃除。礼拝も終わり、教会、幼稚園の掃除をする。お茶の会も話が弾む。そのご主管牧師を迎えて役員会。多くの恵みをいただいた一日だった。

月）保護者会の役員と懇談卒園生の祖父と一緒に。まださっている。幼稚園を保きたいと思っている。北部任の義母がなくなったといっている先生方と相談し指示増えてくるだろう。火）今



（園庭に咲く夏椿の花、別名・沙羅の木）主任が不在の中を元園長が来てくださり、本当に助かった。芋畑を見て、さて？教会付属とはこういうことだと感謝。帰ると熊本からわざわざルターのラテン語と英語の「創世記」をT牧師が持ってきてくださる。一に一行でも訳していきたい。ペリカン氏の「クレド」の本をお礼に取っていただく。水）病院、そして次へのステップと思うが、また、お預け。しかし、今まで良い医者にお会いしている。あとは主に委ねよだ。長男にH幼稚園の運営で行く航空券を取ってもらう。なかなかインターネット、カード決済は腰がひけるから。夜はブラジル時代、同居していた青年だったT君が激しい雨の中を訪問してくれる。昔話に花が咲く。ブラジル時代、T君は友人が多く、よく泊まりに来てくれた。その人の中のKさん、Sさんと電話で話す。みんな60歳を越えている。人生、それぞれ。木）午前中、今日は松崎保育園へ聖書の学び、子供礼拝に出かける。主任が不在なので、私のいない午前中は、設置者のY牧師、幼稚園の運営委員さんがいてくださる。午後から日善幼稚園。少し疲れたのでうたた寝。「年を取るレッスン」を読みながら年を取るってこんなことうなずいている。冷えてきた。金）早朝は、教会の仕事にあてている。祈りを忘れずにいたい。今週は日善幼稚園で濃いい日々を過ごした。誕生会やり方を変えたが職員が何度も試みて変えてくれた。お礼に職員みなにパンをプレゼント。